

優秀な奴隷 としての日本人 ～搾取され続ける日本と日本人～

(株) 人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

〈まえがき〉
貴族と奴隷とは

「日本人は良く学び、良く働き、かつ余り上司に文句を言わない優秀な奴隷だ！」と語るのは世界の富を収奪した欧米の資本家達である。欧米社会は明確に未だ貴族と奴隷の階級区分が、少なくとも法律は別として、個々の人間の意識や、社会文化

の中に集団意識として厳然と存在している。一部制度的にも存在している。そこでは「貴族とは資本を活用して、奴隷の働く環境をシステム設計し、制度化し、その上がりで自らの生計を立てる者」、そして「奴隷とは、そのシステムの下で物を生産し、流通させて、自らの生計を立てる者」との考え方の区分がハッキリしている。

「物造り大国日本」というスローガンを国家目標として堂々と掲げ、その方向に国民を誘導していこうとしている日本は、そうした欧米の資本家から見ると、まさに「自らが奴隷であり、奴隷国家である事を自ら

表明している」ようなものである。欧米の貴族階級から見たら日本人は、何とも扱い易い民族であるようだ。

そして実際に明治維新以降、日本人は彼らの策略の下、見事に優秀な奴隷として働いてきた。

特に第2次世界大戦後の数十年間には実に優秀な奴隷として働いたのであつた。経済的には産業を復興させ、奇跡の復興を演出し、1968年にはドイツを抜いて、世界第2位のGDP大国にまでなったのだ。

しかし、「諸行無常 変転流離」であり、世の移り変わりは早く、「世界の工場、日本」即ち奴隷の作業場の1つとしての工場は、すぐに4匹のアジアの竜「韓国 台湾 香港 シンガポール」に、その立場を譲り、次の奴隷のシステムとして造るべきモノを設計して、他国の工場で作らせて、世界中で売れる形を採用した形の若干地位向上した奴隷になっていた。

しかし今や、それらも中国やインド、南米、旧東欧等に移り、更により広範囲の世界に拡がり、「物造り大国 日本」は、次第に色褪せ、そ

の立場を失い、世界全体の中で徐々に失速させられつつあるのが現在の日本である。しかも、その間に資本を蓄積し自らを資本家に格上げすることもままならず、今日では中途半端な先進国(?)という立場で低迷しているのが現状である。

この貴族と奴隷という階級区分が果たして地球社会にとつて好ましいものかどうかの議論はさて置いて、そして本物の貴族と単なるお金だけの貴族なのかの議論も置いて、このままでは日本という国は本物の貴族にもなれないし、役立つ奴隷としての立場も失い、まさしく世界の中で漂流者の如き存在として「さまよえるオランダ人」ならぬ「さまよえる日本人」となってしまうのである。その事とそれに気づいていない事が大きな問題であり、このままでは日本の将来は危うい！その状態を改善するには、何らかの「明日の日本の姿、形」を策定し、進むべき道を国民の前に呈示しなければならぬ。貴族へ向かうか？それとも奴隷の道を進むのか？それとも他の道があるのか？

こうした議論を更に進める為に、

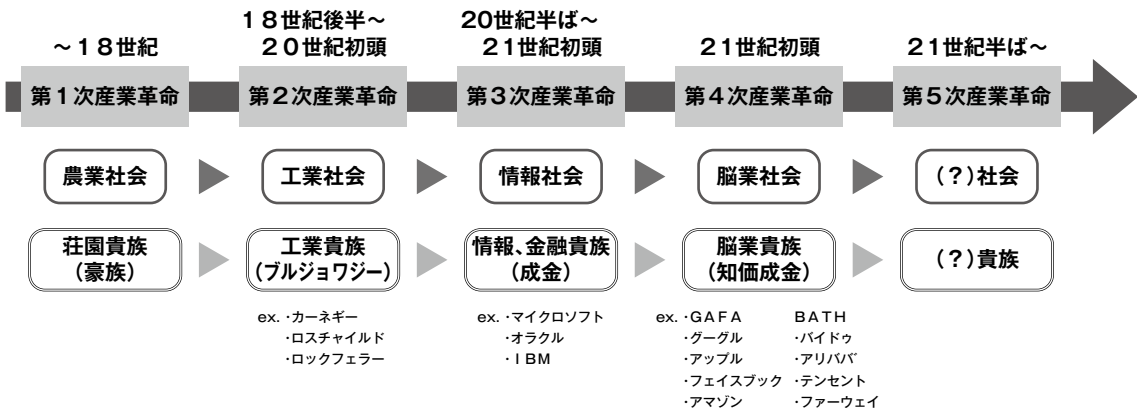


図1 貴族の誕生と変遷

ここではまず歴史的に登場してきた貴族の生誕を見てみよう。

貴族階級は常に各々の時代の産業革命と共に誕生し、成長してきている。一部は衰退し、消滅して行っているが。

そして現在は、第4次産業革命が進行中であり、世界の富豪のイーロン・マスクを始め新しい貴族が続々と誕生している。更に第5次産業革命の波頭も見えつつあるが、その内容は未だはつきりと判っていないが、私は、それは上記全てを合わせた全体革命、あるいは「地球革命」であると捉えている。

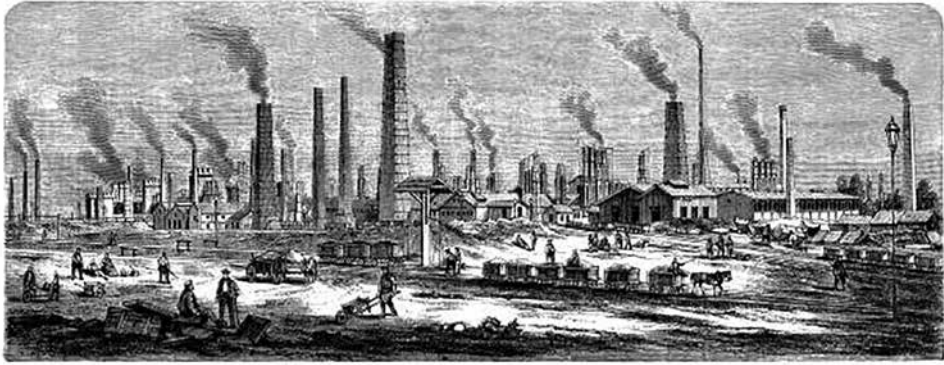
この革命が人類全体を本当に幸せにするのか、それともまた拝金主義のみの新しい貴族を生み出すことになるのか、今のところ判らないが、しかし注目すべきである。

図1を少し見てみると、

明らかに第2次産業革命（18世紀後半から20世紀前半）までは、それ程文明的には大きく世界は進んでない。まず第1次産業革命では、農業の展開により、余剰生産が生まれるようになり、それらを巧みに集め、資本を蓄え、結果的に自らの領地を拡大し、そこで労働者を雇用する形態が整っていった。即ち土地とそこで働く奴隷を有する荘園貴族の登場があった。そして各地において、豪族として権力を振るうと共に、その地域を支配していた。その乱立していた貴族の統合こそが当時のより巨大な国家建設のカギであり、激しい領土拡大、そして統一の戦いが繰り返され、それが統一の戦いが繰り返され、やがて統一国家が出来上がると共に、より巨大な資本家が生まれつつあった。

そして更に貴族が農業から工業へシフトを準備し、第2次産業革命に向けて飛躍をしていく下地が構築されていった。

第2次産業革命になると、動力機関としての蒸気機関が生まれ、それを中核技術として、自動紡績機を生み出し、次いで蒸気機関車、蒸気自



第2次産業革命では巨大化しつつある生産と輸送システムを所有支配することで、
桁違いの金持ちが生まれ、社会的地位を獲得し、工業貴族が誕生した

自動車、蒸気船等々の運搬手段を凄スピードで生み出し始めた。

そうした巨大化しつつある生産と輸送システムを所有支配することで、今までは桁違いの金持ちが生まれ、更に社会的地位を獲得し、ブルジョワジーと呼ばれる工業貴族が誕生し、それまでの荘園貴族と比べて圧倒的に巨大な力を有するようになった。ただ荘園貴族が更に工業化を進め、自身がブルジョワジーになったケースも少なくはない。そして紡績王、石油王、海運王、鉄道王等々呼ばれる貴族達が登場するようになった。まさにその名の如く、1つの世界を支配する王になったのである。

そして第3次産業革命（C&C革命）により、IT企業が誕生し、巨大な企業に成長し、その創業者は巨大な稼ぎをし、情報を扱う仕事が大きなエネルギーを持つに至り、アメリカのシリコンバレーや

インドのバンガロール等がその中心となり、IBMやマイクロソフト、オラクル、等々の情報貴族が続々と誕生した。

更に現在、情報や通信のハードウェアやソフトウェアで財をなすのではなく、それらを活用して、データを巧みに収集（Data Collection）し、ビッグデータとし、それを処理して、新しい知能を脳産物として生み出す脳業社会になり、そこで稼いだ人々が脳業貴族となっている。

そうした貴族の下で、必死に労働者として働き、彼らの稼ぎの一部を労働の対価として受け取る人達、それが奴隷という事になるのである。まさに日本は明らかに脳業社会における奴隷である。日本でも第2次世界大戦までは華族制度があったが、これは今日考えられている産業界において成果を挙げた貴族ではなく社会システムとしての貴族であり、占領軍により廃止された。

ここでの貴族と奴隷の分類は、資本家かどうか1つの基準になっているが、文化的な区分や政治的権力を入れると、また別の定義も存在す

る。ここでは経済活動的区分によってである。

1 何故、日本人が奴隷なのか？

さて、そうした「奴隷と貴族の定義」の下に、日本人の立場を眺めてみると、明らかに日本人は、物造りを選好する奴隷であることに気づくし、これから見えていく如く、世界の資本家（貴族）から、日本人はその労働を気付かない内に巧みに詐取され続けているのである。但し人類としてこの貴族と奴隷なる概念区分をどう正しく考えるかは別の問題である。何故なら、日本人にとって貴族と奴隷という区分は必ずしも西洋人達と違うニュアンスがあるからである。その点はまた別の所で論じよう。ここでは前述の定義の下での世界全体を視野に入れた日本と日本人についての話である。

《1-1》 いつ頃から奴隷になったのか？

この話を具体的に展開していくに



日本人の奴隷化プランは、イエズス会のフランシスコ・ザビエル宣教師の来日の頃から始まっていた

当たり、日本人がいつ頃から世界の資本家（貴族）の奴隷にされたのを見ていこう。少なくとも明治以前は、直前に江戸時代の265年に渡る鎖国時代があり、他国の干渉を排除し、自給自足で265年間も生活していた。外国の支配するところは、一部は長崎等にあつたとしても、長崎奉行が居て、そこが監督したので、全体としては独立国家であつたし、日本国民はよその国の奴隷の立場ではなかつた。という事は、外国勢に働かされるようになったのは明らかに明治維新（1868年）前後からである。その準備、即ち日本人の奴隷化プランは、イエズス会のフランシスコ・ザビエル宣教師の来日（1549年）の頃から始まつた。

日本人の奴隷化プランは、イエズス会のフランシスコ・ザビエル宣教師の来日の頃から始まっていた

疑問を感じていた。彼ら

既に日本でも蘭学やスペイン、ポルトガルの言葉や文化は、江戸時代以前から、かなり入り込んでいた。織田信長の洋装した写真からも、それが判るだろう。その頃の世界は、欧州の白人達の植民地競争が激しく燃え盛る頃で、彼らの歯牙は、中東、アフリカからインドを経て、東南アジアまで伸びていた。その東回り最後の候補地にあたるのが、極東の島国、黄金の国ジバングであつた。全体として貧しい国と雖も、三千数百万人の人間が、三百数十の藩を動かす、それなりの独自の産業も文化も興し、根付いていた。そして貧しくとも、それなりに幸せな国として存在していたのであつた。多くの来日した外国人達は、それまでの他の国の様子（実情）とは何かしら違うものを日本に対し感じ取つていたようである。

その頃来日したハリスやヒュースケンを始めとして多くの外国人が、日本に欧米人が手を出し、彼らの毒牙がこの地をも咬まんとしていた事に強い疑問を感じていた。彼ら

の母国との手紙や日記から、その事が良く判るのである。

そうした一部の心ある人々の心配や躊躇は、元々の海外膨張主義のユダヤ系金融資本家の資本拡大の為の市場化、あるいは植民地化の非人道的な努力の前には吹き飛んでしまひ、国際金融資本家達は、日本の実質的な侵略を着々と展開していった。

それでも、隠れキリシタンはかなりおり、江戸から離れた地域に存在し、活動はかなり活発に持続して

た。そして明治に入ると再びキリスト教の宣教師、牧師の来日は活発となり、宣教師フルベッキの如き人物が多数来日し、日本の中に多くの信仰者や弟子を作り、大きな影響を与えるまでになり、明治維新の演出をした多くの人物をそこから輩出していた。ちなみにフルベッキは東京大学の前身の「南校」の教師もしていた。

本節のテーマは「何故、日本人が奴隷なのか？そしていつ頃から奴隷化の戦略が練られたのか？」である。前述の如く日本人の意識の中に「物造り」への執着心が強い、即ち欧米流に見れば奴隷である事への容認どころか、誇りさえ感じていた事と、本節で示した如く、元々海外の貴族達が日本の植民地化、奴隷化を狙つて来日し、そのチャンスを狙つていた事が明治維新前に窺えるのである。そして間接的に日本の統治者や専門家を教育して、日本全体を隷属させることを狙っていた。そうした事が合わさつて、世界の中で見てみると、日本人は、自らの意識において奴隷的存在であり、日本国は、彼ら国際金融資本家の意図通り、明治



農民が日本人の大多数であり、それが日本人の支配的意識をなしている

以降確実に隷属化される状況となっていたのである。そして現在もその余波の中に居るのである。しかし、元々欧米的定義で見れば奴隷であっても、日本人自身は、ヨーロッパ等での強制的な奴隷化ではなく、自らが率先して奴隷の位置を選好している民族の1つなのである。それ故未だ自身が、欧米的に言えば奴隷である事に気付かないままなのである。これが大問題なのである。何故、自ら奴隷的立場を選好するのであるのか？

元々日本人は第2次世界大戦前までは、80%近くが農民であり、過酷

な労働の中で厳しい農村生活を強いられ、48歳以下の平均寿命であった。しかし貧しいなりに幸せな生活をする術を265年間の戦争の無い江戸時代の中で、身に付けていたとも考えられるが、政治的に見ると、まさに「土農工商」という身分の階級は、農業を2番目に位置付けていたが、実質的待遇は一番下で、重たい税金で農民達は苦しんでいた。その意味で、実質的権力を握っていた武士と天皇を頭とする貴族とがいて、その下で、実質的に奴隷的に生活していたのが80%の農民であり、士以外の商工の人々であった。但し商工に

関しては、税金負担の軽さもあって、その中には特に商いを大きくして、見掛け上は貴族と見做せる程の豪商となり、逆にお金の力で士を巧みにコントロールしていた側面もあった。特に江戸末期は、かなりの藩が商人からかなり借金をしていた。そして江戸時代の商人文化を築いた。経済的には貴族に近い商人も登場した。だが農民に関しては、それなりに生活文化を築いたものの、経済的には厳しい世の中であった。その農民が日本人の大多数であり、それが日本人の支配的意識をなしている。それ故に、日本の為政者たちを洗脳すれば日本全体が容易に奴隷となるのだ。

《1-2》

誰が日本人を

奴隷化しようとしたのか？

第2次産業革命当時のヨーロッパの植民地主義の中で、何よりも植民地を動かしていたのは、フリーメイソンである。その中核となすのが、東インド会社であり、英国、オランダ、フランス、スペイン等々の国に

東インド会社は設立されていた。最初の東インド会社設立は江戸幕府誕生の3年前の1600年にイギリスで設立された。続いて1602年にオランダで設立、そしてそれ以降少しずつ遅れて他の国々に次々と設立をしていった。それらの国々に侵略の道具としての武器を売っていた大手の企業の1つがイギリスのジャーディン・マセソン商会であり、日本の横浜にも支店が出来、吉田茂元首相の養父の吉田健三が日本のトップの役割を握っていた。

そして有名な長崎のグラバー邸のグラバーもマセソン商会の社員であったと言われる。そしてそのいちばん奥の陰にいるのが、ロスチャイルドファミリーなのであった。その間には、多くのエージェントが介在していた。

1853年のロスチャイルドの一族でもあるペリーの浦賀の来航の後、1856年に米領事館が置かれ、初代の領事にハリスが就任した。その後各国の領事館が順次日本に設置され、1868年の明治維新の前に様々な働きかけが江戸幕府と倒幕藩の双方になされていた。そして幕府

にはフランスが、倒幕藩側にはイギリスが武器を売り付けたのであった。一説ではイギリスの銃の方が、フランスの売った銃よりも能力が高かったため、幕府側が負けるように仕掛けられていたという。その銃は、アメリカの南北戦争のお古であるにもかかわらず、高い金額で売りつけられたのであった。

何よりも明治維新を理解する上で重要な点は、倒幕開国派の薩長の中心人物達が、密出国し留学させられた事である。その頃は明らかにフリーメイソンの力が英国を中心に大きく働いていたのである。そして彼らは、ジャーディン・マセソン商会の敷地内の建物に泊められ、そこでロスチャイルドが創立したイルミネティに実質的に乗っ取られたフリーメイソンの人々と接触し、そこで彼ら流の政治経済システムを叩き込まれ、帰国しそこで見聞きし、教わった事を日本で展開したのである。

その英国で見聞きした内容に、明治の志士達は陶酔し、それを日本に持って帰って明治維新を演出し展開したと言われる。

結果として日本は隷属させられ、

絹、陶器、金銀等々多くの物が、当時の相場よりも桁違いの安い価格で買い叩かれることになり、しかもかなりの環境破壊を伴う工業化を展開させられ、日本の多くの塩田が工業用地にされた。現在の瀬戸内コンビナートや京葉コンビナートがまさにそうであった。そして聖徳太子による神仏の摺合は約1000年以上日本人の精神の基盤となっていたが、その神仏の摺合を廃止し、分離させられ、キリスト教の信者であるフリーメイソンの宗教的内容がアングラの的に日本社会に組み入れられたのであった。

明らかに日本は表面的には海外に領土を占領され、政治的に支配された植民地ではなかったが、内容的には実質的に隷属させられ、植民地の如く詐取されていたのであった。最初に関わられた様々な条約が大変に不平等なものであり、その内容を互恵条約に近くする為に大変な努力をさせられた。

まさに相当量(額)の日本の国富が欧米にかすめ取られたのであった。この事を我々日本人は理解せず、ヨーロッパ礼賛を繰り広げる人が多

かった。更に実際に1894年の日清戦争、1904年の日露戦争を欧米の代理戦争として日本に遂行させるべく、体力を消耗させない為に、幕府側と倒幕側との内戦をさせず、西郷隆盛と勝海舟との密談により、江戸城の無血開城が仕掛けられた。実際にその戦争によって日本は体力を消耗する戦いをさせられ、国力を消費させられたのであった。明らかに、そこには、ユダヤ系国際金融資本が日本を実質的に植民地化すると共に、日本人を実質的に奴隷的に扱って、彼らの資本の拡大を図っていたのである。果たして明治の志士達は、それらをどこまで判っていたのだろうか。おそらく彼らの手の内で泳がされていたとは思っていないからであろう。しかも下士出身の彼らの多くは、新しい政府の中での好待遇でもてなされたので、それで満足していた人達が多かったのではなからうか。

実際我々今日生きる日本人は、明治維新の頃の出来事に関して正しい教育がなされず、国際金融資本家達の裏での策略が表に出ないように、

明治の偉人達の開国物語としての物語をでっち上げて、それを下に教育がなされてきたのである。『龍馬が行く』、『山の上の雲』等々を描いた司馬遼太郎作品は、その姿を感動的に描いている。その筆力多くの日本人は感化されたが、事実は違ったのである。未だその事を知らない日本人が圧倒的に多い。

まさに明治維新の出来事は、ロスチャイルドの戦法そのものであり、常に用心深く、自分達が主役である事を糊塗するべく、エージェントを「隠れ蓑」として世界を牛耳ってきたのである。そして日本の場合も例に洩れず、明治維新の前頃から、その餌食にされてきたのである。

さて、ここでのテーマは「誰が日本人を奴隷にしたのか」であるが、それは広くは、近世から近代、そして現代を支配するのは白色人種であり、もっと狭く言えば国際ユダヤ系金融資本であり、更に狭くはイルミネティに乗っ取られたフリーメイソンであり、更に限定すれば、ロスチャイルド家とその周辺の金融資本家集団と言えるのである。

何よりも我々日本人が、明確に意

識上に上らせねばならないのは、今日までの日本の姿になるまでに、白人社会の欲望丸出しの政策や、その推進母体としてのフリーメイソンの陰謀が、明治維新前後からこの日本社会に深く関わり機能していたのである。表の日本近代史では真実の姿は判らないので、裏の日本史をしっかり捉え、表に出していかないと、今日においても日本が奴隷の姿そのままである事を見失ってしまうことになるのだ。いや実際に殆どの日本人は、事実の姿を見失っている。欧米中心の中世以降の世界史ハプスブルグ家、メジチ家、ロスチャイルド家、ロックフェラー家の興亡を知る事によって、この辺りの出来事はほぼ理解出来るのである。

《1-3》

第2次世界大戦後の占領政策

〜日本のアメリカへの隷属化〜

1894年の日清戦争、1904年の日露戦争に続いて、次の10年後である1914年に第1次世界大戦が生じたが、既に述べた如く、こ

れ、その後も日本は非白人国家として厳しく扱われ、そうした中で日本は、日本の産業を維持する為に、アジアに勢力を拡大し、同時に非白人社会の東アジア経済圏を画策した。

しかし、それは当時の世界の支配者たんとする人達から許される筈なく、更に、第2次世界大戦においてはチャーチルとルーズベルトの謀議の下に、巧みに日本の参戦環境作りが行われ、真珠湾攻撃を実行させられ、それを契機として、第2次世界大戦に突入させられたのであった。

その結果、彼らの意図していた如くに、アメリカと参戦させない無条件の下に、ヨーロッパでの戦いを起こしたドイツ、そして基礎的な産業力の弱い日本はイタリアと共に大敗を喫した。そしてアメリカ軍の占領政策の下に、戦後は奴隷的に日本の舵取りをせねばならなくなったのであった。そこでは日本の華族や財閥と地主の解体や、日本の軍事力を支える航空産業を始めとして、多くの産業が規制されると同時に、アメリカの産業の余剰品を受け入れる体制作りをさせられてきたのである。



チャーチルとルーズベルトの謀議の下、巧みに日本の参戦環境作りが行われ、真珠湾攻撃を実行させられた

その1つが、日本人の生命に直接関わる食糧である。アメリカ人の食べない脱脂粉乳やメリケン粉のパンを、第2次世界大戦後のかかりの期間、学校給食としてあてがわれ、子

供の頃から学校給食でそれらに慣らされ、その戦略でパン食が日本の社会に入り込み、その原材料の小麦粉等をアメリカの農家から供給される体制となってしまったのである。恥ずかしいが私もそれで育った世代である。その事からも、今日の海外に支配されている日本人の食生活を改善、改革する日本独自の食糧安保の再生の入り口として、学校給食が大事なのである。既に、元農林水産大臣を努め現在は弁護士士の山田正彦氏により全国の市長への働きがなされ、一部の学校給食は地産地消の形の展開を始めている。

また話は戻るが、明治維新から4つ足の動物、特に牛や豚を食べる慣習を作らされ、その為に肉と共に家畜や、その餌を輸入させられるように環境作りがなされたのである。牧畜は広大な土地を必要とするので、日本の狭い土地では、家庭レベルの食用としては良いが、世界との価格競争では基本的に話にならない。ここにも長期的な戦略的侵略の策謀が見られるのである。

何よりも「食を征する者、国を支配する」の言葉の如く、日本の食は



アメリカの戦後政策を通じて日本の食の多くが
疎んじられ、それに支配された

アメリカの戦後政策を通じて日本の食の多くが疎んじられ、アメリカナイズされ、それに支配され、日本の米を軽視し、今日に至っては、何と先進国の中で圧倒的に低い食糧自給率(カロリーベース)37%にまで下げられてしまった。そして種子やヒナまで、そして飼料や肥料まで考えると実質10%以下と言われる状況を迎えている。

更に、今日では日本人の祖先達が営々と開発してきた種子を日本人自体が管理する事を禁止する種子法を

廃し、公共の場で管理し、育てていた種子までを種苗法の成立により、モンサント等のほかは私企業に明け渡し、日本の農家は、毎年1年限りの種子を高値で買わされるようになってしまった。それと共に、彼らの提供する化学製品の多用により、日本の土壌そのものが痛められ、著しく劣化させられてしまっている。

何とあさはかな日本のリーダー達であろうか！巧みに欧米の戦略に踊らされてしまっているのだ！

更に中国人やビルゲイツ達により、日本の農地や水源池を買われ、TPPの実施により、更に日本の農業は厳しい状況に追いやられる事になるのである。何故ここまで農林水産業を日本自ら破壊するのか、その理由が判らない。日本という国は売国奴ばかりになってしまったのだろうか？元々明治維新の頃から、そうした状況下に置かれていたのだからしょうがないのか！

また農業以外でも、日本の工業においても、アメリカの日本支配は同じである。アメリカは日本の工業の発展を妨げ、アメリカ製品をそれも

アメリカで余ったモノを、いかに輸出し、買わせるかを画策し、日本政府を隷属下に置き、日本の産業が新たに這い上がり、成長するたびに邪魔をする策を仕掛けてくる。それが常であったし、今も同様である。

そして今や労働人口の8割近くを吸収し、日本の産業基盤である中小企業に対し、その労働生産性の低さから、外国人のコンサルタントやアドバイザーの進言により、生産性の低い中小企業を潰したり、合併させたりする努力がなされている。それは日本の産業の足腰を弱める形の動きをする。明らかに中小企業の労働生産性の低さを理由とした整理政策は、日本の産業構造を良く観察し、

特色を見抜いた末の外国側の日本の産業の成長の抑制策の1つである。日本の中小企業のいたいけな位の商品開発努力は、それを巧みに吸い上げる大企業の力の源泉でもあるのだ。それを潰して日本の大企業の足腰を弱めようとしているのである。それに日本政府は無思慮にもその策略に乗り、生産性の低い中小企業の合理化策を取り入れている。そして日本人の多くが本音は別として、そ

れを支持しているのだ。まさに日本人を奴隷の如くに、教育し、時に応じて、自分の都合で奴隷化した日本人を活用したり、その自主的努力を妨げたりしているのがアメリカという占領国なのである。要は貴族は奴隷支配の為の制度作りを主な仕事とするのだ！そして実行してきているのが世界の歴史なのだ。そして自らのその奴隷役を買っているのが日本人なのだ。

もち論、アメリカ以外の白人国家の多くもまた日本に対し同様の事をしてきた。そして今日では、若干風向きは変わってきているが、何らかの新しい形で日本を利用しているのである。それが第2次世界大戦から、今日までの敗戦国日本への仕掛けであり、今日も続いているのだ。

元々狩猟民族は獲物を取る為に、ワナを仕掛けるが、農耕民族は、その収穫の為にワナを用いない。まさにワナを用いない日本人は、白人社会の仕掛けるワナに嵌められてきたのである。

果たして、長年の間に培われた日本人のお人好しを変え、ワナを仕掛ける人々に立ち向かえるのか？